

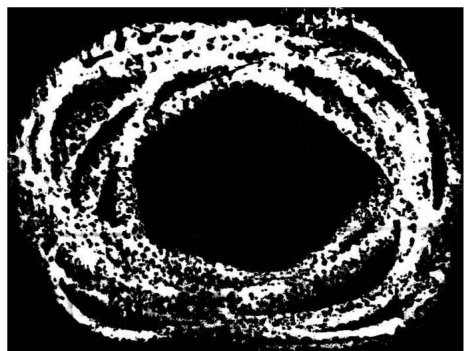
文学博士 三谷栄一 著

枕草子の解釈と問題探求

有 精 堂

枕草子の解釈と問題探求

文学博士 三谷栄一 著



著書略歴

国学院大学国文科卒、帝国女子専門学校教授、青森師範学校教授、弘前大学教授を経て、現在実践女子大学教授、文学博士〔著書〕竹取物語解説・竹取物語の鑑賞・徒然草解説・物語文学史論・日本文学の民俗学的研究・竹取物語要解・現代語訳竹取物語・源氏物語要解（桐壺）（帚木）（若紫）・全解徒然草・頭注日本文学史・日本文学要史・徒然草の解釈と鑑賞・全解枕草子等

昭和四十七年十二月一日 廿五版發行 国文問題探求叢書⁴ 枕草子の解釈と問題探求	著 者 三 谷 栄 一	発 行 者 東京都千代田区神田神保町一ノ三九 山 崎 誠	印 刷 者 東京都新宿区市ケ谷富久町一三三 株式会社 井 村 印 刷 所	発 行 所 東京都千代田区神田神保町一丁目卅九番地 振替口座東京四〇六八四番 有精堂出版株式会社
---	---------------------------	---	---	--

はしがき

本書は、高等学校の生徒諸君が、枕草子を学習する際の参考書として、また大学受験の実力を養おうとする時に役立たせようとして編修されたものである。従つて

一、本書は、現行の高等学校古典乙の諸教科書に見える教材は勿論のこと、補助教材などに見える多くの段も、ほとんど網羅したつもりである。おおよそ、これだけを学習すれば、「枕草子」の重要な段を読破することになる筈である。

一、本書は、三巻本により、章段は朝日古典全書本に従つたが、春曙抄本の章段も便宜上併せ示した。

一、本書は「枕草子」に取材した、過去十か年ほどの、全国各大学の入試問題を、各段毎に加え、或いは新たに問題を添えて、大学受験に向つての実力増進に役立つように努力した。

一、本書は、右の目的をみたすために、「語釈・文法」の詳述につとめたことはいうまでもないが、「口訳」は、つとめて原文に即して、原文の語脈がわかるようにし、便宜的に補った語句には括弧を用いて示した。

一、「問題研究」の欄は、殊に注意を払い、解答を得るためには、問題を「いかに考え」、「いかに

解く」かを示そうと努力した。

一、索引は、古典単語の知識を整理するにも役立つように編修した。

以上、本書を熟読することによって、諸君の実力は一段と充実されて、その学習も、受験へ向って一層完璧になるものと期待されるのである。本書の原稿や校正については、森田知子夫人の御援助を得た。ここに厚く感謝申したい。

昭和三十八年三月

著者識す

目次

はしがき	一	(四) お前にもいみじう	三四
解題	一	五 正月一日、三月三日は(第八段、春・八)	三六
一 春は曙(第一段、春・一)	五	六 清涼殿の丑寅の隅の(第二段、春・二〇)	三七
二 正月一日は(第三段、春・三)	九	(一) 清涼殿の丑寅の隅の	三七
(一) 正月一日は	九	(二) 宮の、御前の御几帳押しやりて	四〇
(二) 十五日、節供まゐりすゑ	三	(三) 御硯とりおろして	四二
(三) 除目のころなど	四	(四) 古今の冊子を御前に	四五
(四) 三月三日は	五	(五) 村上の御時に	四七
(五) 四月祭のころ	六	(六) いかでなほ	四九
(六) 祭近くなりて	六	七 すさまじきもの(第三段、春・二一)	五一
三 大進生昌が家に(第六段、春・六)	三〇	(一) すさまじきもの	五一
(一) 大進生昌が家に	三〇	(二) また、かならず来べき人のもとに	五三
(二) お前にまゐりて	三三	(三) 験者のもののけ調ずとて	五四
(三) 同じ局に住む若き人々	三三	(四) 除目につかさ得ぬ人の家	五五
(四) 中間なる折に	三六	(五) よろしうよみたりと	五八
四 上にさぶらふ御ねこは(第七段、春・七)	三六	八 にくきもの(第二六段、春・二四)	五九
(一) 上にさぶらふ御ねこは	三六	(一) にくきものいそぐことあるを	五九
(二) おもひのをりは	三三	(二) なでふことなき人の	六一
(三) 暗うなりて	三三	(三) また、酒飲みてあめき	六二

〔四〕	ねぶたしと思ひてふしたるに	六五
九	心ときめきするもの(第二七段、春・二七)	六五
一〇	木の花は(第三五段、春・三四)	六六
〔一〕	木の花は	六六
〔二〕	梨の花	六七
〔三〕	桐の木の花	六八
二	鳥は(第三九段、春・三八)	六九
〔一〕	鳥は	六九
〔二〕	うぐひすは	七〇
〔三〕	人をも	七〇
三	あてなるもの(第四〇段、春・三九)	七〇
三	虫は(第四一段、春・四〇)	七〇
四	七月ばかり、風いたう吹きて	七〇
	(第四二段、春・四一)	七〇
五	草の花は(第六四段、春・五七)	七〇
〔一〕	草の花は	七〇
〔二〕	これに薄を入れぬ	七〇
六	おぼつかなきもの(第六七段、春・五八)	七二
七	ありがたきもの(第七一段、春・六二)	七三
八	頭の中將のすずるなる虚言を聞きて	七三
	(第七八段、春・七〇)	七五
〔一〕	頭の中將のすずるなる虚言を聞きて	七五
〔二〕	なげしの下に	八六
〔三〕	いみじく憎みたまふに	八七
〔四〕	みな寝て	八九
〔五〕	修理の亮則光	九一
〔六〕	物語などしてゐたるほどに	九四
九	ねたきもの(第九一段、春・八二)	九五
〔一〕	ねたきもの	九五
〔二〕	おもしろき萩	九七
二〇	御かたがた、君達、上人など	九八
	(第九七段、春・八七)	九八
二	中納言殿まゐりたまひて	一〇〇
	(第九八段、春・八八)	一〇〇
三	殿上より、梅のみな散りたる枝を	一〇〇
	(第一〇一段、春・九一)	一〇一
三	二月つごもりごろに(第一〇二段、春・九二)	一〇三
四	はしたなきもの(第一二三段、春・一〇九)	一〇四
〔一〕	はしたなきもの	一〇四
〔二〕	八幡の行幸の	一〇五
五	関白殿、黒戸より出でさせたまふとて	一〇六
	(第一二四段、春・一一〇)	一〇六
〔一〕	関白殿	一〇六
〔二〕	中納言の君の	一〇六

二 九月ばかり、夜ひと夜降りあかしつる雨の

(第一二五段、春・一一一)……二〇九

三 七日の日の若菜を(第一二六段、春・一一二)……二一〇

六 五月ばかり、月もなういと暗きに

(第一三二段、春・一一八)……二二三

〔一〕 五月ばかり……………二二三

〔二〕 頭の弁もろともに……………二二四

二 うつくしきもの(第一四六段、春・一三二)……二二六

三 心もとなきもの(第一五五段、春・一四二)……二二八

〔一〕 心もとなきもの……………二二八

〔二〕 なにごとにもあれ……………二二九

三 雪のいと高うはあらで

(第一七六段、春・一五七)……二三三

三 宮にはじめてまゐりたるころ

(第一七九段、春・一六一)……二三四

〔一〕 宮にはじめてまゐりたるころ……………二三四

〔二〕 ものなど問はせたまひ……………二二六

〔三〕 宮は……………二二〇

〔四〕 ひさしく居たまへるを……………二二三

三 ふと心おとりとかするものは

(第一八八段、春・二四三)……二二六

四 風は嵐(第一九〇段、春・一六二)……二二八

三 野分のまたの日こそ

(第一九一段、春・一六四)……二二九

三 笛は(第二〇七段、春・一八一)……二四二

三 五月ばかり(第二〇九段、春・一八三)……二四三

六 いみじう暑きころ(第二一〇段、春・一八四)……二四五

元 月のいとあかきに(第二一九段、春・一八七)……二四七

四 八月つごもり(第二二三段、春・二二五)……二四七

四 御乳母の大輔の命婦(第二二六段、春・ナシ)……二四九

三 降るものは(第二三六段、春・二〇四)……二五〇

三 世のなかなほいと心憂きものは

(第二五一段、春・二三〇)……二五二

〔一〕 世のなかに……………二五二

〔二〕 殿上人……………二五三

四 よろずの事よりも情あるこそ

(第二五三段、春・二三二)……二五四

三 人の顔にとりわきてよしと見ゆるところは

(第二五五段、春・二三四)……二五五

四 大蔵卿ばかり耳とき人はなし

(第二五九段、春・一九八)……二五八

四 うれしきもの(第二六〇段、春・二三五)……二六〇

〔一〕 うれしきもの……………二六〇

〔二〕 陸奥国紙……………	一三	〔第二九六段、春・二七〇〕……………	一七五
〔三〕 ものをりに……………	一四	五 この冊子（第三〇一段、春・三〇〇・三〇一）……………	一六
四 方違などして夜深くかへる……………	一五	〔一〕 この冊子……………	一六
〔第二八一一段、春・二五五〕……………	一六	〔二〕 宮の御前に……………	一六
五 香炉峰の雪（第二八二段、春・二五六）……………	一六	〔三〕 左中将……………	一六
〔第二八四段、春・二五八〕……………	一七	解答編……………	一八
六 三月ばかり、物忌しにとて……………	一七	重要語句・文法索引……………	一九
七 僧都の御めのとのままなど……………	一七		

解題

枕草子は、いうまでもなく、源氏物語とならんで、わが国、平安時代の女流文学の最高峯をなす、すぐれた散文作品である。

枕草子は、別名を「清少納言枕草子」といって、特に「清少納言」を冠したり、或は全く異った「清少納言記」「清少納言抄」といい、単に「清少納言」という題名でも伝えられた伝本がある。この点から考えて、そのはじめは、確たる題名はなかったもので、後人が付したものと考えられる。

作者は、本書の別名が示すように、清少納言である。清少納言というのは、宮廷奉仕の折の女房としての清少納言と
その称呼

呼称であって、実名ではなく、実名は明かでない。清原氏の出身であることから、姓の一字を冠したのであって、宮廷においては、多くは枕草子を通じて見てもわかるように、単に「少納言」と記され、何か他と弁別される必要ある時にのみ、「清少納言」と記されたのである。しかしどうしたわけで少納言と呼ばれたか詳かでない。普通、女房の名というものは、父や夫などの近親者の官職名によって呼ばれるのが通例であるのに、清少納言の父にも、夫と目される人人の中にも、少納言となった証がなく、今のところ不明といわざるを得ない。

そのように、当時の一般の女房の呼び名の基本は、自己の近親者に求めたのであるが、それというのも、女房の家系、家柄なりを、その呼び名によつて、直接表示しようとする為であり、従つて、呼び名は自己の宮仕中の身分地位を示しているものと考えて誤りはない。少納言は大体において、下臈げらう（後宮に仕えた女官の身分の低い者）でありながら、中臈ちゅうらう（後宮などに仕えた女官の中級の位置の者）かけた地位を示していたらしい。清少納言は元来は下臈出身の女房である。それを、お仕えした定子中宮が、特に例外的に、父祖の官位によらない、相應の呼称を与えたのではないかといわれている。

一体、清少納言の父は清原元輔もとすけである。清原氏は、代代学問または歌道を以つて立つ家柄であつて、少納言の曾祖父にあたる深養父ふかやふは、古今集の著名な歌人であるが身分は高くない。父の元輔も後撰集の撰進にあづかった「梨壺なしつぼの五人」

の一人であるが、しかし地位は低く、河内權守、周防守などを経て、晩年肥後守に任ぜられたが、結局受領として低い地位で終った人である。清少納言はそのような家柄の生れであって、しかもいつ生まれて、いつ没したか、全く明らかでない。その履歴に關しても、この枕草子を通じて知り得る以外はよくわからない。いつ頃、宮廷生活に入ったかも知られていない。大体、正暦四年（九六〇）初春、一条天皇の中宮定子（關白藤原道隆の態）にお仕えして、それから約十年間、即ち長保二年（一〇〇〇）二月、中宮定子が皇后となられ、十二月十六日に、嫔子内親王を生み給うて、翌日、御年二十五才で崩御し給うまでお仕えしたもののらしいが、その後の消息に至ってはまったく明かでない。

宮仕の十年足らずの間、定子中宮にとって、清少納言はこよいい友人でもあり、忠誠な侍女でもあり、肝胆あい照らす、主従の仲であつたことが、この草子の記述からも窺える。そんなところからも、定子中宮が、例外的に相應な呼称をもつて遇したということも考えられることである。

清少納言宮仕の間には、定子中宮の身の上にはいろいろのことが起つた。長徳元年（九八〇）、中宮の父君、道隆の薨去とともに、政治の実権は漸次その弟道長に移り、中宮の御兄弟、伊周・隆家の失脚事件などがあつて、長徳二年には、中宮は御落飾遊ばされ、また長保元年（九九〇）には、道長の長女彰子が入内し、中宮の晩年は随分淋しいものであつたのであるが、清少納言の、中宮への愛情と忠誠とには、いささかもかわる所はなかつた。

枕草子は、実に清少納言が、この宮仕中の随想や日記を整理したものである。

なぜ「枕草子」という題名がつけられたか、よくわからない。草子は「冊子」とも書く。綴じた本という称という書名であるが、その上の「枕」がはつきりしない。それについては、巻末に「この冊子、目に見え、心に思ふことを……」と記し、「枕にこそは侍らめ」といつている一条があるが、それと關係あることは一般に信じられている。しかし「枕」については種種の説がある。その一つに、「枕頭」などという意の「枕」と解し、手近いものの意で、左右に置いて、物事を書きつける本の意に解している。もう一つの有力な説に、歌枕・枕言の「枕」と同じ用法だとする説である。すなわち、この草子には「山は」「峰は」「すさまじきもの」「にくきもの」などの題や題詞で書いてある章段がある。つまりこれからいうと、「枕」とは、ある題のもとにいくつかの語彙・文句が集録せられているという義で

あることになる。なるほど、これは類纂的な部分には適切な説だが、随想・日記の部分にはどうも当たらない。もつともこの「枕」をもととして、こうした随想、日記類が段落と後に付け加えられたものかもしれない。とにかく、このようにして、枕草子は、日本文学史上に、はじめて随筆文学なる分野を成立したのである。

成立

枕草子は、その内容の検討からして、染筆の時期は、大体、正暦五年（九九四）九月から長保二年（一〇〇一）末、定成の子皇后崩御の少し前に、欄筆したのではないかといわれている。勿論、その間に、はやくから草稿本らしいものが出来ていて、それに手を加えられて今日のようなものになったのであろう。しかし内容は、清少納言の宮仕した期間の大部分の事柄であることが、この枕草子によって、うかがい知ることが出来るのである。

内容

本書は、前にも触れたように、古来、随筆文学の祖といわれる。その内容についても、前にも触れたように、ある題のもとに、いくつかの語彙とか文句が集録される、「山は」「池は」というような物尽し的な章段とか、「めでたきもの」「にくきもの」などのような、ある共通の批評語によって、事物・事件などを一括して列挙し、ここに作者の生活感覚を述べようとする批評的類聚とがある。それも組織的でなく、筆のおもむくままに記して、一種の散文詩となっている。さらに自然観照、人事観察といったものの一群と、それに、宮仕え中の様様な事件の日記的な記録などを織込んでいる。文章は余韻をふくむ簡潔な表現で、あるいは長短の語句を巧みにまぜ用い、あるいは極端な省略法を使って、俳諧に近い文体を構成している。その他、作者の勝気なつよい性格や、鋭い頭の働き、鋭敏で正確な観察力、すぐれた美意識などが、ほとんどの章段をとつても、その歯切れのよいテンポの早い叙事の運びに、躍如としてうかがわれる。またこの枕草子には、「をかし」という語が非常に多く用いられている。これは興趣を感じて賞美する意で、扱われる事柄がすべて明るく、ほがらかであることを意味する、そこに作者の人生態度が現われているといえる。

伝本

右のように、古来、随筆文学の祖として多くの人人に支持され、多くの人の手を渡っただけに、いろいろの人の手が加わって異本が少くない。それを系統的に整理すると、組織の上から、まず二つの著しい対比をなす。

(一) 雑纂形態

(1) 伝能因所持本系統

(2) 三卷本系統

(一) 類纂形態

(3) 前田家本
(4) 堺本系統

そして、その能因法師が所持したと伝えられる系統でも、三条西家旧藏本他の写本などと、板本として十行、十二行、十三行、それぞれの古活字本がある。北村季吟が編したこの枕草子の有名な註釈書、「春曙抄」の用いた本文は、この系統の末流といつてよい。しかしこの春曙抄の本文は長い間、流布され、多くの人人に読まれてきた。

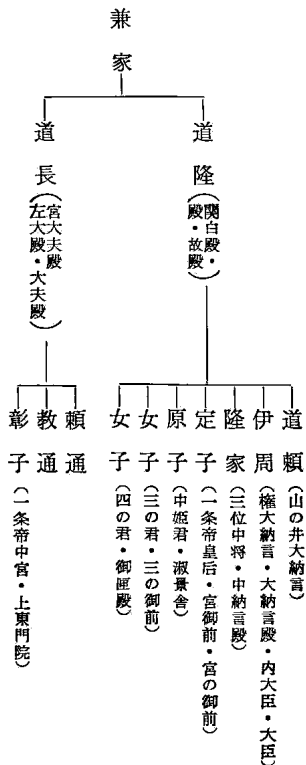
これに対して三卷本は、安貞二年の奥書を持つ本で、上中下三卷からなるのでこの称があり、この系統も二類にわかれるが、いずれも雑纂的で、この方が伝能因本系統より本文がよいとされ、段段と多くの学者から支持されて来ている。

〔清原氏系図〕

扶桑拾葉集作者
作図ニヨル



〔藤原氏系図〕



一 春 は 曙

(第一段)

春はあけぼの。¹ やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏はよる。月の頃はさらなり、やみも³なほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行く³もをかし。雨など降る³もをかし。

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行く³とて、みつよつ、ふたつみつなどといそぐさへあはれなり。まいて雁^{かり}などのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音虫の音など、はた、いふべきにあらず。

冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜のいとしろきも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたる³もいとつきつきし。昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、火桶^{かづ}の火もしろき灰がちになりてわろし。

【問題A】

問一 傍線1、2、5の部分を解釈せよ。

問二 傍線3の部分の「も」はそれぞれ何に對して、「やみもなほ」「うちひかりて行くも」「雨など降るも」と述べられたか。

口訳 春は曙(がすばらしい。)だんだん白んで行く山の上のあたりの空が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているのは。

夏は夜。月の出ている頃は言うまでもない。月の出ていない時でも、螢が沢山(あちこちと)飛び交っているのは美しい。或はまた、一つ二つぐらいずつ、ほのかに光って(飛んで)行くのも、きれいだ。雨などが降るのも気持がよい。

秋は夕暮。夕日がかつとさして、山の端に近く落ちかかって来た時に、鳥がねぐらに帰るらしく、三つ四つ二つ三つなどとつらねて、大急ぎで飛んでゆくのも、感傷をさそう。まして、雁などの列を作ったのが、(ずっと遠くの空を)小さく飛んでゆくのは非常に面白い。日が沈んでしまつてから、風の音や虫のなき声などはまた、言いようもなく面白いものだ。

冬は早朝。雪の降りつもっている景色は、何とも言いようなくきれいだ。霜がまっ白に置いているのも、すばらしいものだ。また、霜が置いてなくても、非常に寒い(朝)に、火などを急いでおこして、炭を持つてくはつて歩くのも、大変冬の朝らしい風景だ。昼になって気温があたたかくゆるんでゆくと、火桶の火も白い灰ばかりのようになって、面白くない。

【問題研究】

問題文は枕草子の冒頭として古来有名な文である。「春は曙」の出だしから「春曙抄」という書さえる位である。読解にあたつては、省略の多い文であるから特に注意する必要がある。問題Aは解釈

問三 傍線4の部分にふり仮名をせよ。

問四 傍線6の「い」とつきづきし」とは何の事を「い」とつきづきし」と述べたのか。

問五 江戸時代まで（江戸時代を含む）の随筆文学の作品名三つを挙げ、その作者名をも記せ。（名 大）

【問題B】

(a) 心なき身にもあはれは知られけり 鴨立つ 沢の秋のゆふぐれ 西行法師

(b) 薄霧のまがきの花の朝じめり 秋はゆふべとたれかいひけむ 藤原清輔

(c) 見わたせば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となにおもひけむ 後鳥羽上皇（新古今集）

問一 右の「枕冊子」の文において、清少納言の試みた、四季それぞれの日における最も情動的な時刻についての見解は、平安朝以後一つの美的標準として伝統されたが、右の「新古今集」の三首の中、その伝統の上に立って詠まれているのはどれと思うか。符号（abc）で下に示せ。

問二 それ以外の二首は、その伝統を破っていると思われるが、それはどれとどれか。また、どういう点が伝統を破った新しい発見と思うか。

作品
(符号で示せ)

新発見の内容

問三 右の三首の和歌の季節と、その季節を表わす語と、その詠まれた時刻とはどうか。次の表に記入せよ。また、三首のそれぞれの情趣を表わす情景は、それぞれの作のどの部分か。原形のままで左の表に記入せよ。

和歌	季節	季節語	時刻	情景

(大分大)

を主とした問題で、問一は古語の意味。現代語と古語では同語でも意味の上で差違があるので注意する。

「やうやう」はだんだん。やつとではない。「さらなり」「つとめて」共に古文を読む上ではぜひとも知っておく必要のある重要語の一つ。問二の「も」は、二つ以上の事物の類似または一致を示す係助詞であるから、対立するものを上文にさぐる。三番目の「雨など降るも」は、一本には「降るさへをかし」となっている。「さへ」は添加の意の副助詞であるから、「やみに飛ぶほたるをかし、さらに加えて、雨が降るのもをかし」の意となる。しかし、ここは助詞「も」が用いられているので、「いつもはいやな雨も、をかし」という気持をあらわすと取れるので、解は、「月の出るころ」に「雨などの降る夜」が対応されていると解するべきである。問四の「つきづきし」は似つかわしい意であるが、古文にこの語が現われたら、何に何が似つかわしいのかを明確にしなければならない。ここでは「冬の早朝」に対して「火などいそぎおこして炭もてわたる」ことが似つかわしいのである。問五は文学史の常識である。「徒然草」は落せない。

問題Bは鑑賞を主とした問題で、三首の和歌はいずれも新古今集中の歌。aは巻四、三六二秋歌上「題しらず 西行法師」。山家集では「秋ものへまかりける道にて」と題詞のついている歌である。この歌は、寂蓮法師「寂しさはその色としもなかりけり 懶たつ山の秋の夕暮」と藤原定家の「見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦の苫やの秋の夕暮」と共に、三夕の歌として古来名歌として人口にかいしやしている。歌意は、

出家して世情一般の趣向など断ったわが身でさえ

【問題C】

春はあけぼの。やうやうしろくなり行く。山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日花やかにさして山の端いと近くなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。まして雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるいとをかし。日入りはてて風のおと虫のねなどいとはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白く、またさでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるものとつきつきし。昼になりてぬるくゆるびもて行けば、火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

右の文を読んで次記の設問に答えよ。

問一 右の文中のク活用の形容詞と下二段活用の動詞とを抜き出し、記入例にならって該当欄に記入せよ。

	語の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
一	ク活用の「形容詞」	「」					
二	ク活用の「形容詞」	「」					
三	ク活用の「形容詞」	「」					
四	ク活用の「形容詞」	「」					
五	ク活用の「形容詞」	「」					
六	ク活用の「形容詞」	「」					
七	ク活用の「形容詞」	「」					

も、この鳴が飛びたつ田沢の、この秋の夕暮の景を見ては、哀愁をしみじみと感ぜられたことだよ。「鳴立つ沢」は実景であつて、地名ではない。

時
bは巻四、三四〇秋歌上「崇徳院に百首歌奉りける藤原清輔朝臣」、歌意は

うすらと霧の立つている垣根の中の花が朝露に濡れた様子のなんともいえない美しい景よ。こんなに秋の朝がよいのに、秋は夕方がまさっていると、誰が言ったのだろう。「まがきの花」柴や竹などで目をあらく作った垣根。その中に咲いている花で、何の花ともきめられない。

cは巻一、三六春歌上「をとこども詩をつくりて歌に合せ侍りしに水郷春望といふことを 太上天皇」で、これは「元久詩歌合」の歌でもあり、この歌に合わせられたのは藤原親経の「湖南湖北山千里潮去り潮来つて浪幾重」という詩である。一首の歌意は

見渡すと、かなたの山裾の方が春霞でぼやかとすんでいる水無瀬川の風景よ。こんなに春の夕べの景はよい景色であるのに、夕方の趣は秋がまさると、何故いままで思っていたのであろうか。水無瀬川—大阪府島上郡。後鳥羽院の離宮があり、水郷としての歌枕の名所。「なに思ひけむ」—ナニは副詞で何故の意。連体形の結びをとる。

問一では(b)「たれかいひけむ」(c)「なにおもひけむ」にそれぞれ注意し、(b)が秋の朝を、(c)が春の夕暮れを賞美している点を見抜くこと。問二・問三は前問の関連問題であり、問一が解せれば自ずと理解出来るはずである。問三の季語には注意する必要がある。

八	下二段活用 「用」				
九	下二段活用 「用」				
一〇	下二段活用 「用」				

記入例	四段活用 「行く」				
	行く	行く	行く	行く	行く

問二 次に掲げる文は、前の本文についての評論であるが、その空所（一から五まで）に最もよくあてはまる語を、後に掲げた語群の中から選んで、その符号を記せ。

この文を読んでみると、作者の自然観照の特質は、対象を常に特定の時点と一〇〇において捕らえ、それを固定化していることである。つまり流動してやまない自然を、特定の美の二〇〇において潔癖に捕らえ、その印象を三〇〇・視覚的に定着させるのである。従ってまた、こうした観照を表現する文体は、四〇〇した、省略の多い簡勁なものとなり、作者の観照が純一に燃焼する時には、詩的な韻律さえ帯びて来る。この観照眼や表現の中には、たしかに近世に栄えた五〇〇文学へと流動し伝統してゆくべき、一つの源泉さへ認められる。

イ 時間 口 利 那 随 筆 ニ 俳 諧 ホ 連 歌
ヘ 配合 ト 対 立 チ 情 趣 的 リ 緊 縮 ヌ 整 備
ル 絵 画的 ヲ 抒 情的 (千葉大)

【語釈・文法】

○春はあけぼの—春はあけぼのがすばらしいの意。体言止めで、以下に「をかし」あるいは「いとをかし」の述語省略の形。以下「夏はよる」「秋は夕暮」「冬はつとめて」等みな同様の構成である。

○やうやう—「やくやく」のウ音便。次第に。

だんだん。今日の「や」との意ではない。時間的経過をあらわす副詞で、「なり行く」にかかる。

○山ぎは—山のそば。「山の端（山の稜線）」とは区別して用いられている語。

○むらさきだちる雲の—この「紫」は赤みを帯びた紫。濃い赤色。「だつ」は「……」

問題cは、本文を春曙抄本によっているもので、先の三巻本とはかなり相違する。問一は文法問題で、いずれも文法のきそをしっかりと頭に入れておけば容易なはず。問二の評論は麻生磯次・萩原浅男共著「日記・隨筆」の一節。一は上の「時点」、二は上の「流動してやまない」、三は下の「視覚的」、四は下の「簡勁」などの語から考えて後の項目から選べばよい。

なお、この歌合せについては「増鏡」につぎのようなくわしい叙述が載っているので、抄出しておく。

「鳥羽殿、白河殿なども修理せさせたまひて、常に渡り住ませたまへど、なほまた水無瀬といふ所に、えも言はずおもしろき院造りして、しばしば通ひおはしましつゝ、春秋の花もみぢにつけても、み心ゆく限り世を響かして遊びをのみぞしたまふ。所がらも、はるばると川に臨める眺望、いとおもしろくな。元久のころ、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋と何思ひけん

かやぶきの廊・渡殿など、はるばるとえんにをかしうせさせたまへり。御前の山より滝落されたる石のたたずまひ、こけ深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千代をこめたるかすみの洞なり。」

を「おびた」の意で、名詞につづいて、その様子のあらわれて来ることをいう動詞構成の接尾語。「の」は主語を示す格助詞。

○さらなり—もちろんである。いうまでもない。「頃は」を主語とする述語。

○なほ—やはりの意で、「をかし」にかかる副詞。